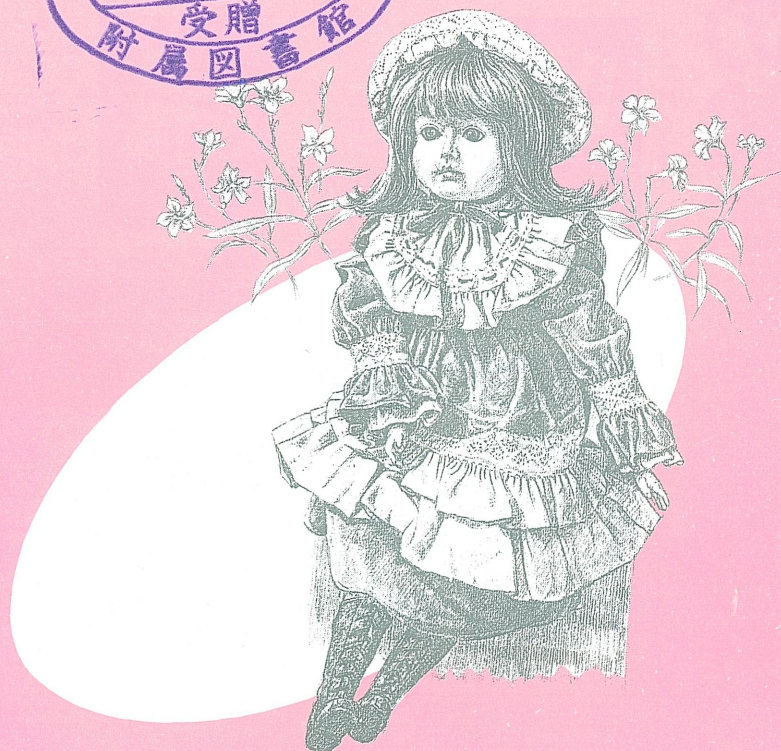
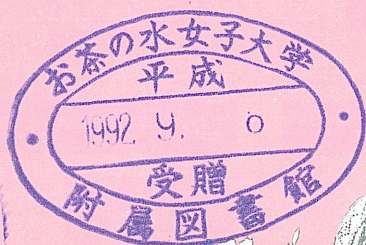


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1992 9



第91巻 第9号 日本幼稚園協会

ウォーリーの絵本

大人も子どももいっしょに楽しめる、
ウォーリー探しの絵本、人気爆発中。



ウォーリーのおおきなすてきなポスターブック

大きな画面のポスター判なので、大勢でウォーリー探しが楽しめます。また、各ページにミシン線がついているので、切り離して壁に飾ることもできます。遊び方は既刊4冊と同じです。

ウォーリーと悪役オズローを探せ！

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳
53cm×38cm・11場面 定価2,500円(税込)

①ウォーリーをさがせ！



ウォーリーを探せ！ウォーリーの落とし物を探せ！261回楽しめるウォーリーの追跡パズル絵本です。

・日本図書館協会選定図書
・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳
大型判・26頁・定価1,300円(税込)

②タイムトラバラーウォーリーをおえ！



石器時代、ローマ時代などにウォーリーがタイムトリップ。ウォーリーと彼の落した本を探し追跡パズル絵本です。

・日本図書館協会選定図書
・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳
大型判・26頁・定価1,300円(税込)

③ウォーリーのふしぎなたび



ウォーリーは世にも不思議な旅に出た。ウォーリーの秘密が記されている巻物を探しパズル絵本です。

・日本図書館協会選定図書
・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳
大型判・26頁・定価1,300円(税込)

④ウォーリーのおもしろゲームブック



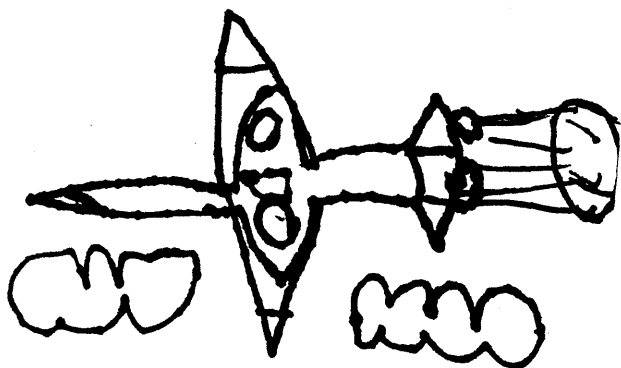
ウォーリー追跡隊のみなさん！くちゃくちゃになるほど探すものがあるよ。ゆつくり楽しんでください。

・日本図書館協会選定図書
・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳
B5変型判・20頁・ふるく付・定価1,300円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

幼 児 の 教 育



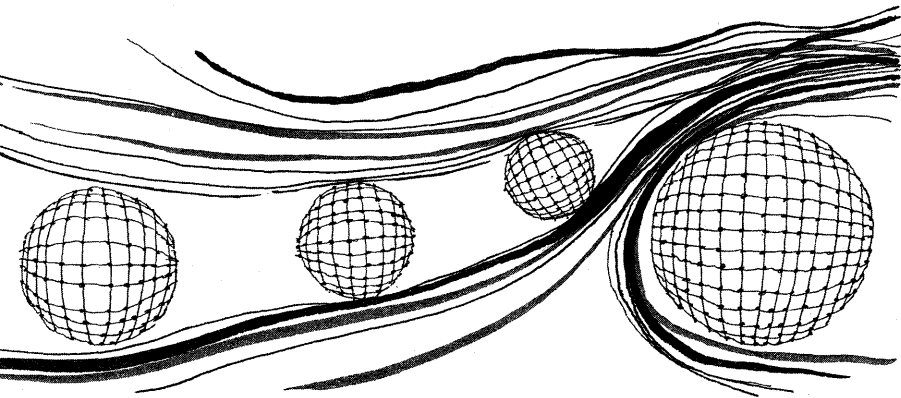
第91卷 第9号

幼児の教育 目次

— 第九十一卷 第九号 —

© 1992
日本幼稚園協会

写真・子供讃歌……………	(4)
ある日の保育から……………	津守 真……………(6)
慣習化した言葉の獲得……………	立川多恵子……………(10)
都市に浮かぶ幼稚園(1) 少子化の波の中で……………	嶺村 法子……………(18)
都市に浮かぶ幼稚園(2) 一人だけの年少組……………	紙谷千恵子……………(23)
ビデオを見て保育を考える……………	守永 英子……………(29)
園庭より(19) 時の標 ^{しるし} ……………	松井 とし……………(34)



幼児の笑いとその保育における意味(5) 五歳児の笑い……………友定 啓子… (36)

保育への視座(5) 若い保育者の方々へ……………河邊 杲… (44)

ある日の育児日記から(21)……………佐藤 和代… (49)

空間を区切ること……………伊集院理子… (50)

鳴門旅行記(上)……………上田 雪江… (54)

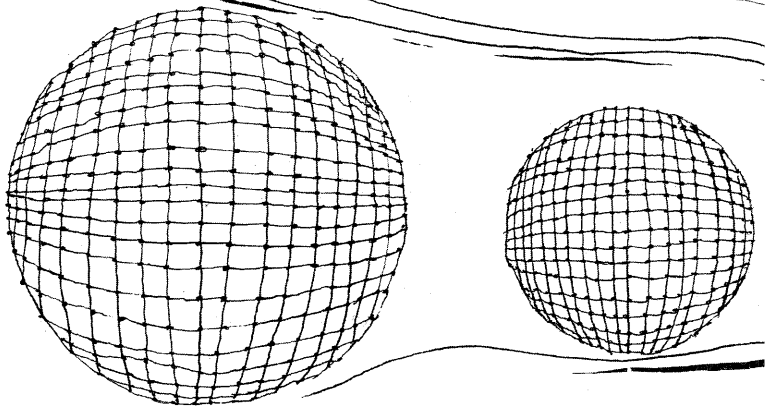
表紙・平野 清／扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／吉岡 晶子・岩上 節子

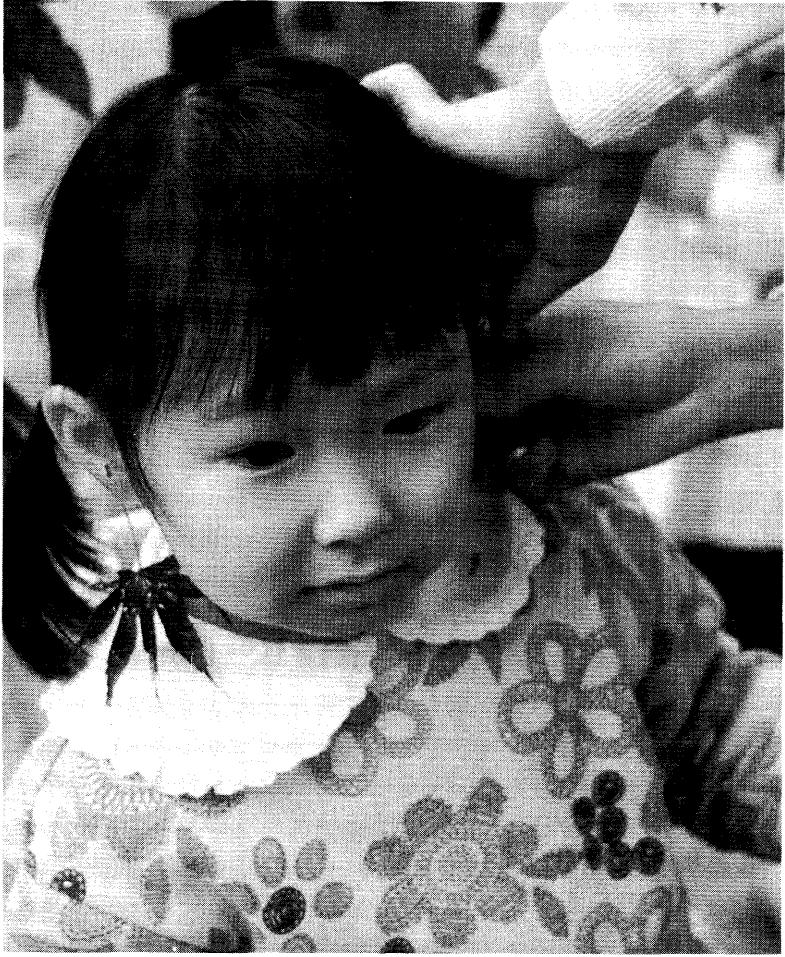
編集部・大沢 啓子



子 供 讚 歌



攝影・平野
清



葉っぱで、王様、お姫様。

ある日の保育から

津守 真

S 夫は、朝、門から走って入ってくると、部屋の入口で、「イタカッタ イタカッタ」と私に手を開いて見せた。よく見たがどこも怪我をした様子はない。部屋に入るとまずトランポリンをとぶが、「アブナイ アブナイ」と何度も言う。S 夫は一と月程前に幼稚園部に入ってきたのだが、高い所に上ったり、トランポリンで不安定にとびながら、「アブナイ アブナイ」と言ったのが、印象的だった。そのことばの中に何か本人の危機感を感じて、私はその傍にいるとき、危なかったけど、落ちないように助けてあげるからね、とことばを添えた。

この朝、S 夫がトランポリンをとんでいる間に、八か月の赤ん坊をいつも胸に抱いて

送ってくる母親が部屋を出ようとした。目ざとくそれを見たS夫はトランポリンをおりて、母親のところに行った。私は、お母さんに手をつないでもらったら、と言うと、母親は優しくS夫を引き寄せ、S夫は二、三秒、母親によりかかって、すぐにまた、トランポリンをとびはじめた。

母親が去った後、S夫は急にホールに走っていった。あとに残された私は、どうしようかと迷ったが、少し間をおいてゆっくりと歩いてホールにいった。S夫はホールのトランポリンの上から私を見ると、嬉しそうに笑って、私の手をとってトランポリンをとびながら、「アブナカッタ アブナカッタ」と言った。しばらくすると、また急に走り去って幼稚部にいった。こうしてホールと幼稚部の部屋の間を何度も往復した。そして私もその笑顔にさそわれて、何度もいったり来たりした。そのときホールで他の子と遊んでいた実習生があとになって話してくれたのだが、S夫は、「クルカナ クルカナ」と言ってそのたびに私を待っていたとのことだった。

こうしてS夫は一日中よく遊ぶのだが、途中でふと「ママは」と言うことがあった。私は、ママはかならずお迎えにくるからねと言うと、元気に遊びはじめた。帰りがけに母親のところにとんでいくと、S夫は「オムカエにいこう」と何度もいう。「オムカエ」という場所があつて、そこに赤ん坊と母親とが行っていたとS夫は考えているらしいと母親は

言った。

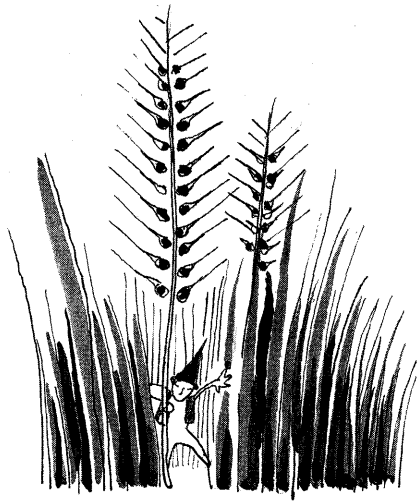
これから何日も、幼稚部から走り去ってホールにいつて私があらわれるのを待つ遊びはくり返された。そして、私の顔を見ると、「カエツキタ」と言って笑うのである。一度自分が手放したものが自分の手もとに帰ってくるということがこの子のテーマになっていることを私は知った。

丁度、こんな最中に、私は娘の家を久しぶりに訪ねた。生後三か月になった赤ん坊を母親が抱き上げたとき、三歳をすぎた上の子が「お母さんは、Yちゃん（三か月の妹のこと）のお母さんなの？」とまじめな親で母親を見上げてたずねた。母親はびっくりして赤ん坊をおろして上の子を抱いた。そして赤ん坊は私が見るようになった。五、六月号に記したこの後日談である。三歳の子どもにとっては、これまで自分だけのものだった母親が、あとから来た赤ん坊の母親でもあるということとは、すぐには理解しがたいことなだらう。この子どもは、たまたま、この疑問をことばに表し、大人もすぐに理解できた。しかし、同じ疑問をもった子どもが、赤ん坊の髪の毛を引っ張ったりかみついたりして、それを表現したら、大人がそれを理解できるまでには時間がかかるだらう。

朝、門から入ってきたとき、S夫が「イタカッタ イタカッタ」と手を開いて見せたの

は、もしかしたら転んだのかもしれないが、それ以上に、心が痛かったのだろうと私は思った。それは第三子の出生に伴い、多くの子どもが経験する心の痛みである。S夫はそれをこんなに簡潔に表現してくれている。私は、母親と話し合いながら、子どものもつ表現力にあらためて感心し、その疑問を解くことに力をかしたいと考えた。

(愛育養護学校)



慣習化した言葉の獲得

立川多恵子

はじめに

人は挨拶を大切にする。その中には「おはよう」「ありがとう」といった慣習化された言葉があり、それらの指導は幼児教育の中では特に重要視されている。

挨拶は対人関係をスムーズにしていくために大切であると同時にその民族の特有な文化であり、その形や言葉を子どもたちに伝えて行く必要がある。しかし子どもは慣習化された挨拶の形や言葉を伝えら

れただけでは不十分である。慣習的な言葉にも内面的な裏付けがあって初めて価値が生まれる。そこで今回は「おはよう」「ありがとう」の言葉の内面の育っていくプロセスを考えてみたいと思う。なおこの際、子どもたちが遊びに参加する時用いる「入れて」「いいよ」の言葉についても再考したいと考える。

1、「おはよう」について

大分以前になるが、ある幼稚園を訪ねた際こんな情景を目にしたことがある。それは登園してきた一人の子どもが先生に「おはようございます」を言わずに保育室に入ろうとした時のことである。

先生は朝の挨拶をしない子どもに「おはようございますは……」と催促した。しかしその子はただもじもじしているだけであった。先生は「おはよう」が言えるまで、保育室に入れようとしなかった。園長の話ではその園では創設以来挨拶の指導を重要視しているということであった。

たしかに「おはよう」は朝の出会いの挨拶であり、先生方が大切にしている気持ちはわからないではないが、もう少し指導の内容を工夫できないものだろうかと考えた。そんな具体的場面に会って、私は朝の挨拶についていろいろ考えてみる事が出来た。

大分前になるが、幼稚園の若い先生から次のような話を聞いた。「私のクラスになかなか遊び出せない

子どもがいます。登園すると、朝の支度をした後毎日机に向かって、家庭から持ってきた分厚い本を開いて見ているのです。私が他の遊びに誘おうとすると、『いいの、お勉強』というのです」と話す。

担任としてはその子に早く幼稚園生活の楽しさを伝えてやりたかったに違いない。その先生の話ではこの子は朝の挨拶がとても丁寧で最敬礼して「おはようございます」とするという。しばらくして走り回って遊ぶようになり、先生もほっとしたが、気がついてみたら、あの丁寧な朝の挨拶は見られなくなっていた。そればかりか、登園すると先生のお尻をたたいてからかばんを置きに行くようになってしまった。

解放されることで、家庭でしつけられた丁寧な挨拶はしなくなったようだ。私は先生の話を聞いて、園での緊張がほぐれ、形式的なものが崩れてしまったのだと考えた。しかし崩れることによって、その子なりの出会いの仕方が生まれるかもしれないと期

待した。その後機会があつてその園を訪れたが、その子は朝、先生に出会ふと極めて自然に「おはよう」と言つて保育室に入つて行つた。家庭で教えられた「おはよう」の挨拶は、その子なりの「おはよう」の挨拶に変わつていた。

その後私は次のような経験から朝の挨拶について、再び考える機会を与えられた。

近隣の幼稚園を訪ねた時のことである。園の玄関から「おはようございます」といつて入つたら、玄関の傍の部屋から三人の女の子がとび出してきた。

私はもう一度「おはようございます」と言つた。子どもは私を見た。その中の一人が「だれのお母さん」と聞いた。そしてもう一人の子が「チューリップ組？」と聞いた。私は「園長先生のお友達よ」と答えた。するとその中の一人が「園長先生呼んできて上げる」と階段を駆け上がった。その子が戻つてきたので、「ありがとう」と言つて、もう一度「おはようございます」と頭を下げた。子どもたちはこ

の時初めて「おはようございます」と答礼してくれた。

子どもたちは見慣れない訪問客に出会つて、「だれだろう?」「なんのために来たのだろう」等、訪



問者と自分たちとの関係を知ろうとした。「園長先生の友達」と分かると初めて親近感を持って「おはようございます」と挨拶をしてくれたのだろう。

「おはよう」の挨拶は就園前の子どもでも教えればやる。むしろ年齢が高くなると、「この人はだれだろうか、挨拶した方がよいのだろうか」等いろいろなことを考えるようになり、単に模倣的な挨拶ができなくなる。

2、「ありがとう」について

園では「ありがとう」の教育も大切にされる。そのため先生が子どもに「ありがとうは」と催促する場面を見かける。

入園当初のことである。なかなか動き出せない子がいたので、私はその子を誘って兎小屋に行き一緒に餌をやった。彼はびっくりした表情で餌を食べる兎の口許をじっと見ていた。初めての経験だったにちがいない。

降園時私と再び出会ったその子は傍にいる先生から「遊んで貰って、ありがとうは」と言われ、とっさに大きく手を振り嬉しそうに「バイバイ」と言った。子どものこうした仕様に担任と私は思わず微笑んだ。さっきの兎に餌をやったことが楽しかったのだろう。その子が担任に「ありがとうは」と促されて発した言葉は「バイバイ」であり、「ありがとう」ではなかったが、大きく手を振って「バイバイ」をしたその子の表情には「さっきは楽しかったよ、先生」といった気持ちが充分含まれていると思う。

やがて彼も嬉しかった時、楽しかった時、感謝の気持ちの湧く時に「ありがとう」と言うようになるに違いない。そのためには先生が子どもとの生活の中で、気さくに「ありがとう」を言うことが大切である。そのことは子どもの人格を尊重することにもなる。

「ありがとう」について、学生Sはレポートの中

で次のように述べている。

*

理恵と一緒に絵を描いた時、切り抜いてホチキスで留めて、小さな絵本を作り「あげる」と渡しました。私はその時の理恵の喜びようを今でも忘れることが出来ません。彼女はとても嬉しそうに目を輝かせて「ありがとう」といつてくれたのです。そんな感謝してくれて、私の方が驚いてしまいました。

理恵はその時、心から「ありがとう」と思っ言ってくれたのです。私はすっかり感激してしまいました。た。

子どもは傍にいる大人に「ほら、ありがとうは」と催促されて、初めて「ありがとう」ということが多いようです。それは本当の「ありがとう」ではないと思うのですが、それでも子どもから「ありがとう」と言われれば嬉しくなります。この日の理恵の「ありがとう」は彼女の嬉しさがそのまま「ありがとう」の言葉に表現されていたようで、逆に私の方が「そんなに喜

んでくれてありがとう」と言いたくなってしまう程でした。……略

*

子どもは実習生の配慮に、思わず「ありがとう」の言葉が出た。その「ありがとう」は子どもの真の喜びから生み出された言葉である。実習生の方も「そんなに喜んで貰ってありがとう」と言いたくなったと述べている。理恵の「ありがとう」の言葉に実習生は心をゆすぶられたのである。保育の世界は子どもを育てるばかりではない。大人が子どもに育てられたり変えられたりする。

3、「入れて」「いいよ」

研究会で一人の園長が、この頃の若い先生は「入れて」「いいよ」の指導もできないといっって嘆いていたことがあった。幼稚園によっては、園庭でも、保育室でも「入れて」「いいよ」の声を聞く。

ある幼稚園で出会った場面である。数人の子ども

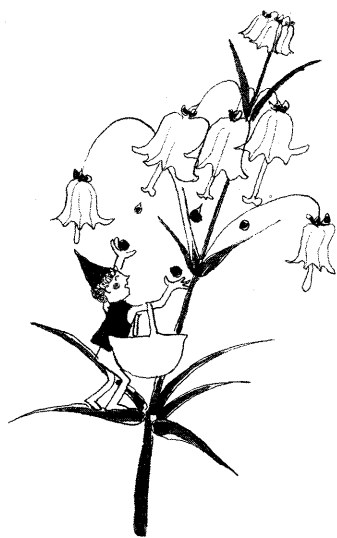
が、お家ごっこをして遊んでいるところに一人の子どもが「入れて」とやってきたが「だーめ」と言われて断られてしまった。

その子は「入れてくれないの」と先生に言いつけに来た。先生は『いいよ』というお約束だったでしょう」と叱った。子どもたちは渋々その子を遊びに入れてやった。ところがその子が遊び出すとまもなく、前から遊んでいた子どもは次々にいなくなってしまうとその遊びは終わった。

この時も私はしばらく子どもの「入れて」「いいよ」の言葉に興味を持った。

その頃知り合いの園長から、「うちの園に言葉の出ない子がいるので様子を見てやってください」という依頼を受けた。そこで早速その園に向いて子どもを観察していたが、時々その子の姿を見失った。何度目かにその子を見つけたのがチューリップの球根を掘った後の花壇の傍だった。ここでは数人の子どもが大きな泥山を作って遊んでいた。なか

か面白そうなので、立ち止まって見ていたら、一人の男の子が「入れて」とやってきた。山を作っている子どもたちは一斉に「だーめ」といった。その子は残念そうな顔をしてその場を去った。



次にやってきた子どもも同じように「入れて」と声をかけた。子どもの一人が「シャベル持ってくれば入れてやるよ」と条件をつけた。その子は早速物置に言って赤いシャベルを探すとそれを持って山作りの仲間に入ってしまった。

最後にやってきた男の子は、友達のとやっていることをしばらく見ていたが、「山の上に木を植えるといいよ」と提案して、持っていた二、三本の小枝をその山の上に差し込んだ。山を作っていた子どもたちは小枝を求めて一斉に四方に散った。その間にその子は山の形を好きなように作り変えてしまった。

一番先に「入れて」と言い、「だめ」と言われた子どもはもう一頑張りして貰いたかったが「だめ」と言われたことで、どうしたら入れて貰えるか工夫するだろう。それも大切である。

二番目に条件はついたが、仲間に入れて貰えた子どもの場合は山作りの仲間が、あの子は入れてもいいといった気持ちがあり、条件つきにしたのかもし

れない。「入れて」「いいよ」の慣習的な言葉の指導では経験することのできない人間関係の学習の機会である。最後の子ども入り方はみごとである。「入れて」の言葉なしに入り、遊びの主導権をとってしまった。以前から仲間だったのかもしれない。

「入れて」について、学生Fはレポートで次のように述べている。

*

少し遅れて登園したCが黙ってその活動に入りブロックでピストルを作り始めると、Aが「入れてって言わないとだめだよ」といってブロックを取り上げた。Cが聞こえないふりをして相変わらずブロックで遊んでいると、もう一度Aが「入れてといわなければだめだよ」と言ってCをつついた。その時それまで何も言わなかったBが「入れてといいな」と言い出した。

*

Fは自分が「入れてやろうね」とか、「一緒に遊ぼ

うね」といったら「入れて」「いいよ」の関係を義務づけることになる。そこでしばらく見守っていることにしたと述べている。子どもの世界に子どもなりのルールがあり、それを守れるようになることも成長であるが、それらのルールは子ども同士がぶつかり合いながら徐々に身につけていくことが大切だと考えている。そしてもし「入れてくれない」と言いつけにくる子どもがいたら、私は「もう一度頼んでみたら」と声をかけ、出来るだけ子どもに任せて、見守り、子ども自身が仲間に入れて貰うための工夫をするように援助したいと思ったと結んでいる。

「入れて」「いいよ」の言葉を義務づけるのは賛成できないが、「入れて」が子どもの世界の仲間入りのルールであるとしたら、それを子ども同士の関わりの中で獲得して欲しいと願うFの考え方は大切にしたい。

まとめ

日本社会の慣習的な言葉は、「おはよう」「ありがとう」「入れて」だけではないが、保育界で重要視されている三つの言葉を取り上げ、言葉と内面の育ちの関係について考えてみた。「おはよう」や「ありがとう」にしても、「入れて」にしても、それらは人間関係を円滑にする言葉であり、とかく大人は言葉を教えることに熱心になる。

それも大切ではあるが、言葉や形にこだわると、それらを押しつけることになり、内面が育ちにくくなる。こうした慣習的な言葉の内面を育てるには、余り形式にこだわらないことである。園生活の中で先生や友達と出会いながら、自我を育てて行く中で心情的なものが育って、身近な大人や友達の使っている慣習的な言葉と結びつく。言葉の内側をどう育てていくかは保育の重要な問題である。

都市に浮かぶ幼稚園 (1)

少子化の波の中で

嶺村 法子

○幼稚園をとりまく状況の変化

幼稚園の教員になって、今年で四年目になります。とはいえ、そのうちの約一年間を産休・育休をとって休んでいたのので、実際には、やっと三年めというところですよ。

短い経験年数から語れることは限られています。それでも、この四年の間に、幼稚園をとりまく状況が、年を追うごとに厳しいものになってきているということ、ひしひしと感じます。

とりわけ、幼児・児童数の減少によって、引き起

こされた学校(園)の適正配置の問題は、今や全般的な問題として、地域社会に大きな波紋を投げかけています。

私の勤める園でも、園児数の減少に伴う学級減は、深刻な問題になっています。私が赴任した当時は、年長(五歳児)・年少(四歳児)各二学級ずつ、約八〇名の園児が在籍していました。それが、翌々年には年少が一学級減り、今年度は、年長一学級(一九名)、年少一学級(二〇名)の二学級(計三九名)にまで半減してしまいました。

それでもまだ園児数に恵まれている方で、区内には、年長・年少合わせて一〇名以下で担任も一名という複式学級の園が、一七園中三園もあり、さらに一園は、園児数がゼロとなり、今年度、休園になっています。

ここでは、学級減になったことで、子ども、どうしの育ち合い云々よりも、何より教員の数が減ったこととそれ自体が大きな問題を生み出しているということについて、述べてみたいと思います。

第一に、教員の数が減れば、様々な価値観、保育観がぶつかり合う機会もそれだけ減る、ということが挙げられます。

何もわからない新任の頃、同学年を二人で組んでいたからこそ、先輩に疑問をぶつけることができました。その場で即、解決の道が見出されることばかりではありませんが、毎日の具体的な場面——教材の扱い方や行事への取り組み等々——で、実に多くのことを学ぶことができました。さらに、お互いの

やり方、学級の子どものたちの様子を見合い、話し合う中で、自分との違いに気づき、その違いを生み出している私自身の保育観について、今一度省る機会を与えられました。

こうした保育観のぶつかり合う話し合いの中から、個性として磨かれてくるもの、新たに生み出され共通理解されてくるもの……がその園の保育の幅を広げていくのだと思います。それは、とりもなおさず、子どもたちにとっても、様々な価値観、個性をもった大人との出会いによって触発される可能性が広がることを意味します。だからこそ、今日の前にいるこの子どもたち、この現状について具体的に語り合える仲間が一人でも多い方がいい、そう思うのは欲張りに過ぎるでしょうか。

しかし、自分たちの園だけでは解決できないこの問題も、ちょっと視野を広げればまだまだ工夫の余地があることに気づかされます。近隣の幼稚園どうしの交流、併設の小学校との交流、地域の人たちと

の交流等、積極的に園外に目を向けていくことが、今後の幼稚園の大きな課題になると思います。

第二に、自分や家族の体調が悪い時、頼りにできる同年の担任がいけないことが、無理をすることにつながりかねない、ということが挙げられます。もちろんそうならないよう普段から声をかけ合っていますが、三人の内二人が休んだら……という危惧は拭い去れません。

私の妊娠中は、遠足、プール指導等、主任は言うまでもなく、他の三人に私の抜けた穴を補って余りある程助けられ、元気に乗りきることができました。学年の中でも、主に部屋の中の遊び、外の遊びというふうに分担して見合う等、随分と配慮してもらいました。

そういうことが、文字通り手の数の不足からできにくくなっているのが現状です。妊娠軽減措置として、幼稚園にも小学校の体育講師と同じような扱いの教員が配置されるよう、又、病気療養等が長期に

渡る場合にも、主任ではなく臨時的任用教員が学級担任として配置されるよう、切望する所以です。

第三に、教員の数が減ると、当然一人が受け持つ園務分掌が増える、ということが挙げられます。

行事の立案等、直接保育に関係する仕事にも言えることですが、それ以上に、事務の仕事が増えることは、一人一人の教員にとって大きな負担になっていきます。ややグチャっぽい話になるのですが、いつの日か、幼稚園の教員が事務の仕事から解放され、子どもたちのために使える時間が十分に確保できることを夢見て、声を大にしたいと思います。

学級担任にとっては、慣れない事務の仕事が、保育後の貴重な時間を刻々と削り取っていくという現実があります。主任ともなれば、さらに事務の仕事の占める比重は大きくなり、学級担任から主任になることは、幼稚園の現場から会社へ転職する位のギャップがあるのではないか、と思われる程です。

しかも、細かな約束ごとに則り、複雑な手続きを

経て書類を作成しなければならぬとか、このOA機器の発達した時代において尚、カーボン紙を敷いて力を込めて筆記しなくてはならないとか……が、少人数で能率よくこなさなくてはならない仕事を、ますます時間のかかるものになっているにおもいます。子どもたちが帰った後の二時間が、丸々書類書きで終わってしまった日などは、なんとも虚しいものがあります。

併設の小学校には、事務職員が常動していて、事務の仕事のほとんどを引き受けています。幼稚園にも、週に一度でも二度でもいいから、定期的に事務職員を派遣してくれるような制度ができるよう望んでやみません。そして、早く区とオンライン化されて、園の端末から入力するだけですべてO・Kという時代になってほしいものです。

○少人数園の悩み　　Nさんの話より

最後に、全園児数が二十名に満たない幼稚園に勤

務する同期のNさんから聞いた話をもとに、園児数の減少がもたらしている教員の悩みを、別の側面から見てみたいと思います。

四年間、一〇名以下の学級を担任してきた彼女が、少人数の良さとして挙げたことは、子どもの「先生！」という声に、そう言ってきた子どものその時の思いに、即座に応じることができるといことでした。特に、製作活動や運動的な活動の技能的な面での援助という点で、一人一人に十分に目をかけ、手を添えることができるということは、時にうらやましく感じる点でもあります。

逆に、問題点としては、何でも先生と自分との関係で済ませてしまいがちで、友達どうしのかかわり——物を取り合ったり、譲り合ったり使ったり、順番を待ったり——が少ないということを挙げていました。

子どもに、「何でも先生がやってくれる」「自分の思い通りになる」と思わせないために、Nさんは、

「先生は忙しい」「今、手がふさがっている」という状況に自らを置くことで、子ども自身が、自分たちで何とかしなくては、と思えるような状況を作る工夫をしている、と話していました。それでも尚、大勢の子どもたちと接してきた人から見れば、手をかけすぎているという声もあると聞きました。

しかし、一方で「先生が手をかけてくれるから」という理由で、わざわざ園児数の少ない幼稚園を選んで通わせる保護者の方もいらっしゃると思います。その場合、「手をかける」ということが、実際に手を出す回数という意味で使われているフシもあります。少数数の子どもたちの中で、いかにも先生がいるという居方をしない努力、手出し、口出しをしない努力をしている教師の思いと、少数数園を選んで通わせる保護者の思いとの間にギャップがあることも、少数数園の見逃せない問題点であるように思います。

大人の目の届かない所で展開される子どもの世界を存分に楽しむ、ということが、地域社会の中で非常にできにくくなっている今日、せめて幼稚園という囲いの中では、子どもたちだけの世界を楽しむ時間を保障したい、そう願うのは、私ばかりではないと思うのです。にもかかわらず、園児数の減少という現実が教師の目を逆に届きやすくしている、そしてそれを望む声があるところに、都心で保育することの難しさを感じます。

「でも」とNさんは言います。「子どもの数が多くても少なくとも、こういう子どもに育って欲しい、という教師の願いは変わらないのよね。」と。では、その願いを実現するために何をすべきか——そこに、子どもの数の問題を越えて、私たち保育する者に課せられた普遍的な課題があるように思います。

(中央区立明石幼稚園)

都市に浮かぶ幼稚園 (2)

一人だけの年少組

紙谷 千恵子

平成三年四月。奈保子は中央区立京橋幼稚園に入園しました。昭和六十三年、中央区学校適正配置等審議会より答申が出されて以来、統廃合問題を抱えている当学園は、遂に今年度小学校は新入学児童がない淋しいスタートとなり、幼稚園は娘一人だけの入園でした。

区条例により、当園は昨年から複式学級で、娘は年長組の四名と一緒に過ごしました。園長（学校長と兼任）、主任、担任と三名の職員編成で、先生方には本当に御苦労の多い一年間だったと思います

が、娘にとっては幸福に満ちた日々でした。某先生に「義理で奈保子ちゃんを入園させたんじゃないかって心配していたのよ。」と言われた事もあります。私・姉・弟・そして息子も通った、縁の深い幼稚園です。私の教育実習園でもありました。しかし、可愛い我が娘を義理で入園させる訳がありません。多少の意地はあったかも知れませんが……。確かに客観的にみれば、同年齢の友達がなく、年長組は全員男児。不安の材料は無きにしもあらず。でも「多過ぎるより少な過ぎる方がずっといい」「少ない

マイナス面もあるかも知れないが、プラス面もたくさんある筈”私自身、小規模園で勤務した六年間で確信した事もあって、周囲の心配をよそに、迷う事なしの決断でした。

毎日の園生活で印象的だった事は、幼稚園の先生だけでなく、小学校の先生、主事さん達全員に暖かくつつまれていた事です。この事は娘だけではなく、学園の子供達皆に言える事でした。学園中が大きな家族のようでした。そして、一人一人の存在が認められ、安定しているからなのでしょう。”一番小さい妹”奈保子は、皆に可愛がられてのびのびと育ちました。先生にも子供達にも、心のゆとりがみられました。

園児は五名でしたが、実に良くかかわり、又自然な形で小学生と交流していました。我家のように、八歳半も離れた二人兄妹の娘にとって、何より嬉しかった事と思います。さらに、担任泉先生の、暖かい人柄の良さが、何にもまさる”素晴らしい環境”

でした。

少人数の良さを生かした保育をめざし、新しい試みもたくさんありました。中央区初の”お泊り保育”もその中の一つです。夏休みの夕方から、リュックサックをしょって幼稚園へ。皆で銭湯に入り、カレーパーティー、花火大会、園長先生のマジックショー。先生方の見守る中で、五人揃って楽しい夢を見た事でしょう。親子遠足ならぬ、婆・孫遠足（失礼!!）もあり、浅草の”ほおずき市”へ。一年間の遠足回数、何と十五回。誕生会その他で作ったお料理は十二品目と、泉先生の言葉をお借りすると「ギネスブックに載せたい程」豊かな経験が出来ました。娘のお気に入りのお一つに”五人で入るお風呂”もありました。砂遊びやえのぐで汚れた時、プールで身体が冷えた時等に入ららしいのですが、いつも得意気に報告してくれました。プール遊びもダイナミックでした。何しろ総勢で六十三名ですので、小学校のプールサイドにビニールプールを持ち

込んで思う存分遊びます。学校のプールで泳いだり、ビニールプールを浮かべて船に乗ったり。関東大会決勝出場という輝かしい経歴の持主である先生も子供達も、共にプール遊びを堪能している様子で

した。

少人数だと社会性が育たないのではないかとよく言われます。しかし、教育要領の「人のかかわりに関する領域」のねらいや内容と照合してみても、



▲ みんなで力をあわせてつくった船にのって

園児数の多少には関係ないように思えてなりません。尤も園側がマイナスにならない様、最大の努力をして下さった結果かも知れませんが。又少人数だと教育効果があがらない。この事も答申が出て以来何回もくり返し聞いた言葉です。私は聞く度に、教育効果があがらないのではなく、行政側にとって教育効率が悪いだけだと思っていました。この一年間を通して、何と子供達にとって「幸福な」事。外部から見ると「贅沢な」事だったのではないのでしょうか？

しかし六月のPTA総会で、来年度統合やむなしという結果になってしまいました。数年間の統廃合問題で、行政に対する不信、怒りは山積してしましました。しかし家族とも話し合い、悩み、最終的には娘の事を純粋に考え、「統合先の幼稚園に転園」という結論を出しました。親の方の迷いがなくなっから、時期を考え、冬休み中のある日、娘に話をしました。「きく組さんになったら、うめ組さんのお世

話いっぱいするんだ。」と年長組になる日を心待ちにしている娘に、心の中で謝りながら……。紙面には書ききれないほどたくさんやりとりがあって、やっと転園する事は納得したのですが、お友達が行く小学校と同じ幼稚園に行きたいと言うのです。驚いた事に、幼稚園で友達にも相談したらしく、「大ちゃん、そんなに迷ってないで、地下鉄に乗って行ってみればっていったよ。」と。親子で地下鉄に乗って行ってみました。仲好しの一歳下の友達（保育園児）は、来年どっちの学校へ行くのか、本人や親に電話で確かめたり、いろいろ悩んだ末、やっと統合先の京橋朝海幼稚園に行く、結論が出たのは、二月に入ってからでした。私が一度だけ後悔したのは、この時期でした。

ところが、娘が自分で結論を出した数日後、祖母が横綱千代の富士の「断髮式」のテレビ中継をみてみると、そばで娘が「あのお相撲さんたら、自分でやめるって言ったのに、泣いたりしておかしいよ

ね。奈保ちゃんは、朝海に行っても泣かないよ。」と、言ったと聞いて、私は改めて娘の成長に驚きました。そして、悩ませてしまったけれど、無理に大人人の結論を押しつけないで良かったとおもいました。四歳にしてこの意志、この感情。娘に教えられる事の多い数か月でした。

三月。修了式前には、毎晩のように家で式のリハーサル。そして私は（勤務先の修了式と重なり）残念ながら出席できなかった当日。「奈保子ちゃん」のソロが講堂中に響き渡っていた（私の友人の弁）「そうです。そして閉校・閉園式では、修了児を送ったあと、たった一人の在園児として、先生と共に園旗を区長に納め、小学校八十二年の歴史と共に、幼稚園六十年の幕を閉じたのです。平成四年三月二十四日。期せずして、奈保子五歳の誕生日でした。

四月から京橋朝海幼稚園の年長組になった娘は、毎日元気に通園しています。十九名の組に変わり、多少の戸惑いはあるでしょう。でも当園の先生方

が、春休みを返上し、娘が使っていた懐かしい遊具や、可愛がっていた小鳥、包帯をまいた古いお人形まで運んで下さいました。又先生方の離任式の時には、娘が皆に京橋幼稚園の歌を教え、皆で歌って下さったそうです。統合と唱えながら、園名が変わらないということで「開園式」もしなかった行政に対する不信は、最後まで拭えませんでした。が、先生方の細やかで暖かい配慮に包まれて、楽しい園生活再開です。担任中川先生の、「（一般的に言われている）少人数でのマイナス面はみられませんよ」とのお話に、一安心しています。現在のところ、後遺症といえ、女兒よりも、男児と遊ぶ方が好きな事くらいでしょうか？

最後に、私の友人が、京橋学園PTAの、最後の広報に載せた、メッセージを紹介します。（以前、某私立中学の先生をしていた方で、京橋卒業生でもあります。）

*

京橋小学校・幼稚園がこの銀座の地から消えることは、この地域にとって大きな損失のように思われます。現在の日本は効率的な事がベターである、という考えで動いているようです。少数数の教育は子供同士が競争せず、能力が向上しないと平気で信じている人が多くいます。しかし効率の面からのみ世の中を建て替えてきた結果、現在、世界中から「自分勝手だ。」と、非難される日本が作られたのです。

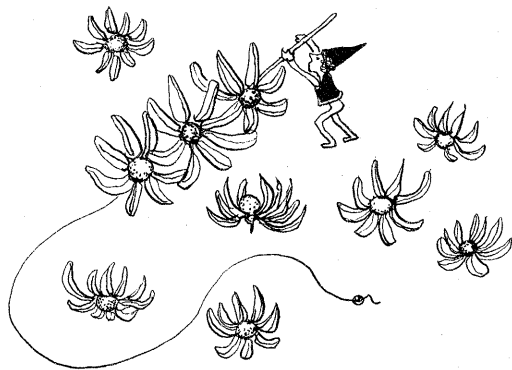
子供達にとって、特に低学年の子供達にとって、短い時間でしたが、真の「ゆとり」の教育を受けられたのは幸せでした。これからの人生で、一つの重要な土台となって、必ず何かの役に立つと思います。

*

住民の生活を守る行政が立案した今回の統合が、最後まで、子どもも親も望まなかったのに、対等合併とはほど遠い形で施行された今、行政の真意は、

学園の“跡地”が証明すると思います。学園は守りきれませんでした。が、奈保子にとって、この一年間が貴重な日々であった事が、せめてもの幸いでした。そして、この統合にかかわった総ての人達が、動揺し、悩んだ事実をここに記します。

(港区立高輪幼稚園)



ビデオを見て 保育を考える

守永 英子

私のクラスに、十五年も観察に通ったとおっしゃるF先生の、記録のビデオを見せていただく機会があった。十五年のうちの最後の三年間のもので、私にとっては、最後に担任したクラスの入園から卒業までのものである。保育中の忙しさの中では、見えなかった子どもの細かい動きが、ビデオによって、まざまざと見られたことは、感動的であった。

三歳児クラスの入園して間もない時期のビデオでは、保育室の出入口近くに、数名の母親の姿が見える。母親から離れられない子どもや、離れてはいても泣いている子どもが、毎年、何人かはいるが、このように多いのは、私にとっても、初めての経験である。二十

名のクラスの半数ほどが、程度の差こそあれ、入れ代わり立ち代わり、そのような時期を過ごした。三歳児二十名に保育者一人では、手のかかる子どもが多い場合、手がまわりかねて、それが又、不安を呼び、相乗的に大変さを増すのかもしれない。数十年、子どもたちの写真を撮りにきて、子どもの姿を見続けてきた出入の写真やさんが、「今年は大変ですわね」と同情してくれるほど、いかにも大変なクラスの雰囲気であった。

その中で、ビデオが捉えている入園後一週間目のM子の姿は、動きも少なく、堅い表情で、机に向かって、画用紙にクレヨンで何か描いている。M子が、入園式の日から、泣いて母親から全く離れられないので、母親も、保育室の入口近くのいすに腰かけ、M子の様子を、堅い表情で見ている。保育中は、漠然と感じられていた、母と子の、重苦しい、切ない“時”を、ビデオは、まざまざと見せてくれる。

私は、楽しそうでないM子のが気にかかりながらも、園庭に行きたいというF夫の求めに応じて、庭に出たり、Y子にさし出された砂のごちそうを受けとったり、R子を手洗いにつれていったり、不安そうなN夫に声をかけたり、と次々に起こることへの対応に追われる。追われながら、一方では、M子が少しでも、楽しさを感じてくれる手だてはないかしら？ と、心のうちで探し求める。

M子は、クレヨンで何か描いた画用紙をまるめて筒にしたものを、母親の方に向け、のぞく。

筒にセロファンをはって、違う色に見えたら、M子は喜ぶだろうか？

黄色いセロファンを、M子の筒にあてて、「ママ、何いろに見える？」と働きかけてみる。M子が興味をもった様子に、「はる？」と尋ねると、初めて提案を受け入れて、セロファンテープでセロファンをはるのを手伝う。M子が積極的にはる意志を見せたので、そのことが、M子の気持ちに反したことではなかったと、ほっとする。セロファンをはった筒で、M子がまわりを見まわすのを見て、首にかけられるように、リボンをつけてあげる。

その日の保育日誌をみると、「リボンで首にかけるようにしてあげると、喜んで帰る。初めて、帰りは、泣かずに腰かけていた——不思議な変化」と記されている。

ビデオは、M子の反応を、もう少し詳細にみせてくれる。初めて、そのビデオをみたとき、私は、M子の、その小さな変化に深く感動した。リボンで首にさげるようにしてあげたとき、M子は、ピョン、ピョンと、とびはね、それを受けて、母親にも笑顔がみられた。M子は、自分から動き出し、机のまわりをまわる。その動きが早くなり、気持ちの弾みを感じられる。まわり方も大きくなり、M子の世界が広がってきたことを象徴するかのようであった。M子は更に、乳母車をみつけて、それを押してまわった。私の小さな心遣いを、M子は、しっかりと自分のエネルギーに変えていったようであった。心の変化を、子どもは、何とこまやかに、体で表現するものであろうか、と思う。ビデオは、保育の中

では見届けられない部分を見せてくれる。

五歳児の六月初めの、砂遊びからけんかが起こる場面のビデオも、興味深いものであった。保育の中で、保育者が、喧嘩の訴えを受けるとき、けんかの起こる一部始終を、見ていないことも多いと思うが、皆さんは、どのように対応してられるのであろうか。

そのとき、保育室にいた私は、砂場にいたS夫の「先生、先生」と泣き叫ぶ声に、急いで、砂場の様子を見に行く。S夫は、「水をかけられた」と訴えるが、まわりの子どもたちは皆、「自分は関係していない」と口々に言う。事情がつかめないままに、とにかく子どもたちの気持ちをしずめたいと思ひ、それぞれの言い分を聞くことにする。聞きながら、心のうちで対応を模索するが、私が方向をつかめないうちに、子どもたちの険悪な空気が自然に治まってきて、私が、何か役割をとる必要も、なくなってきたように感じられる。私は、「そんなに、けんかしなくてもよかったみたいね」と感想を言っただけで、子どもたちは、活動を再開していく。

ビデオをみると、私が呼ばれる前の、子どもたちの活動がわかる。それぞれの子どもが、イメージを出し合い、それを調整し、共有しながら、「橋作り」をしている過程で、イメージが衝突して、けんかになったのである。

おもしろいことに、「水をかけた」と言われたM夫は、画面では、じょうろをもって、S夫の後を通ったのであるが、初めてビデオを見たとき、私には、M夫がわざと水をかけ

たようには見えなかった。ビデオを撮っていたF先生も、そう思わなかったようである。

M夫は、おとなしい子どもであったし、さんぶりと水がかかったわけでもなかったの
で、誤ってかかったと思えた。しかし、くり返しビデオを見ているうちに、その水のかけ
方は、控え目であるが、意図的であったことが見えてくる。M夫は、S夫と対立したT夫
の仲良しである。おとなしいM夫の、T夫に味方したい気持ちの現れと理解できる。

ビデオですら、見極めにくい事実を、周囲の子どもたちが捉えるのは至難のことである
うし、それどころか、子どもたちは、自分の立場を守ろうとすることが先に立って、私の
理解を助けようとするゆとりはなかった。

状況が捉えられないまま、はっきりした役割もとらず、何とも無策だったと思う。た
だ、救いは、事実を突きとめようと子どもを問いつめてうそをつかせるような状況を作ら
なかったこと、子どもたちが反目し合ったまままで終わらずに、活動が再開していったこ
と、子どもから私への働きかけがふえて、けんかへの対応が、子どもとの距離を広げるこ
となく、受け入れられたと感じられたこと、などである。

しかし、他に、対応の仕方がなかったであろうか。他の人だったら、どのように対応す
るのだろうか。今なお、心に残る課題である。

(二)・お茶の水女子大学附属幼稚園)

時の標しるし

松井 とし

かつて子どもたちが遊び、うさぎ一家がくつろいだ幼稚園の庭は、都会の一隅の小さな空間に過ぎなかったが、私たちに四季折々の自然と安らぎを感じさせてくれた。園庭の隅に植えられた桜は年毎に成長し、入園式には満開だった。垣根のバラがこぼれるように咲く頃には、花びらづくし。ままごとのケーキを作ったり、首飾りを作ったりして遊んだ。小さな芝生でもごさをしいて食べるお弁当は、遠足の時のようにおいしかった。うさぎたちはクローバーが大好物で黙々とよく食べ、幸せそうだった。

夏になると、傍らにカンナの花咲く「ジャブ

ジャブ池」で水浴びをしたり、園庭中をどろんこにして遊ぶ子どもたちの歓声がこだました。大騒ぎのシャワーと着替えを終え、ほっとして外の緑に目をやると、テラスの花壇に風船かずらが揺れていた。

二期は生い茂った雑草の中の虫とりと、おしろい花やあさがおの色水づくりで始まった。ジャングルジムの上に、大きく枝を張ったしいの木からは、帽子をかぶったままのつやつやしたどんぐりが落ちた。木枯らしが吹く頃になると、少ない落葉をみんなで一生命集めて焚き、やきいもを作ってふうふう言いながら食べ

た。

園庭をとり囲む植え込みに、真白い水仙が香り良く咲き始めると、いよいよ冬將軍の到来。

ビルの日陰になって冷たい風が吹き抜けても、

子どもたちは元気いっぱい。毎日サッカーに興じていた。

ささやかながら自然とともに子どもたちが暮らす平和な園は、生きるものにとってオアシスだったのだろうか。迷子の犬やリス、カメ等の突然の来訪者に驚かされたこともしばしばであった。最後の頃には、野鳥も訪ねてくるようになり、本を片手にバードウォッチングを楽しむことができた。テラスの雨どいの中では、毎年雀のひながかえり賑やかなことだった。

歴史を閉じてもお、しばらくはカーテンを引いたままで、まるで夏休み中のように、幼稚

園は静かなたたずまいだった。しかしその夏の終わりに訪ねてみると、工事用の白いビニールが全てを覆い隠してしまっていた。中には毎朝子どもたちが「おはようございます！」と駆け抜けたバラのアーチ門や固定遊具類が転がっていた。

次に訪ねた時には、建て替え予定の隣の県立高校の建物も取り壊され、何もかも全てが消えてなくなっていた。整地された広い敷地がはるか向こうの道路まで続き、もはやどこまでか、あの園庭だったのか、見当もつかなかった。

あれから二年余り経ち、幼稚園のあった場所は高校のテニスコートに生まれ変わった。その片隅には「時の標」と刻まれた記念碑が肅然と建っているだけである。

(元・幼稚園教諭)

幼児の笑いとその保育における意味（5）

五歳児の笑い

友定 啓子

卒園前の最後の一年間、笑いは大きく変化をとげる。それは、笑いの二面性を子どもたちが認識し始めたからのものである。理解力も増してきて「おかしさ」を自らつくることのできるようになり、その笑いを他者と共有することに積極的になる。また人間関係が恒常的なものになってくることに、笑いが密接な役割を果たしているように思われる。五歳児の終わり頃に、子ども自身が笑いをコントロールする場面が出てきたことも大きな変化である。最後からだのタブーに続くものとしては性に関する笑いが出てきたことが特徴としてあげられる。

一、おかしさからユーモアへ

四歳児にはおかしさを自分で作ることは少し難しい。作っても自分が笑ってしまうところがある。五歳児になると、特に言語を駆使して、自分で笑いを作り、相手を笑わせることを楽しむようになる。まず、言語の音声をつかって遊ぶ。

△記録1▽ 「ごはんつぶつぶつぶ、いっぱいみなみなみなつけるん?」「何それ、英語?」

△記録2▽ B夫「なまりの兵隊の新しい歌考えたよ。ナマコの兵隊トテチテタ」A夫「ナマズの兵隊トロロロ」L夫「なんやー、デバ男!」「たぬきのくろべえ男!」「たぬきのくろべえきつね!」

次に、同音異義を楽しむ。一つの言葉に二つの意味を持たせることができるようになる。かけことばである。

△記録3▽ 先生「今から、保育所の園歌うたうから、一緒に歌ってくれる?」男児四、五人「えーんか、えんか(いーんですか、いいんですか)」

△記録4▽ 男児が川の絵を描く。その流れの中に漢字の川の形に見える部分がある。「なんじゃ?、こりや、川か?」「川って書いてある」「そうじゃ、川」「ギャグか?」「ギャグ、ギャグ」「ふとんがふっとんだ」

そして、なかには論理の逆転まで考えることができる子もいる。

△記録5▽ 先生がお手玉を作る時の注意をする。「針はあぶない、目に入ったらたいへんだ」という話をしたら、I夫がニコニコ笑って「じゃ、目つぶつとこう」と言う。

△記録6▽ B夫「ぼく、目で休んでる時、『のんびりしとけ』っていわれたけど、さぼって遊んでた」と笑顔で言う。先生が「アハハハハ」と笑う。

こういうユーモアのセンスには先生も笑ってしまう。そこで起こっていることに対して、一定の距離をおいて見ることができるのである。これを子どもたちは人間関係の形成に活用する。このように笑いを積極的に作り出すことによって、共に共感しあい、親和的な関係を強化していく。

二、笑い笑われる関係

一方、同じ笑いの共有でも、相手との関係が切れている笑いもある。

△記録7▽ 男児三人が笑ってP夫を見る。P夫、顔をまっかにして相手につかみかかろうとする。

△記録8▽ 給食時、女児数人がF夫を囲んで笑いころげている。F夫がふざけた拍子に手が自分のコップに当たってしまった、お茶がこぼれてしまったのである。まわりの子どもたちは「アハハハ、アハハハ」と笑い、「自分のをたおした」となおさら強く笑う。「ヒーヒヒ」とおかしくてたまらないというように笑う。

△記録7▽での笑いの内容は不明である。しかしここに笑いの典型的な人間関係を見ることができる。笑う者と笑われる者がいて、そこには共感関係は見られず、むしろ笑われる者には侮辱であり、攻撃と感ぜられる。一方笑う者同士は、笑いによって攻撃の緊張を解消し、共感関係を維持しているのである。

△記録8▽のF夫はよくふざけるし失敗も多い。みんながそれを知っている。行為自体のおかしさもあるが、これはF夫であるということが笑う側の子どもたちにとっては意味がある。でなければこんなにひどく笑わない。F夫は笑われることを求めているようにも思われる。喜んでるわけではないが、おこるわけでもないし反撃もしない。類似の記録がいくつかある。

F夫に関しては気になることがずっとあった。この子の笑いは育っていないのではないかと思えることが続いている。どこか身体的な笑いが多いのである。人と関わりを持つとうとする時、この子は自分のからだを差し出す。わざとぶつかっていたり、踏まれるようにしたりするのである。自分の方からである。みんなが列をつくって並んでいるようなところでわざわざたおれ込む。そうやってからだの接触を図って、そこでの快感を楽しんでいるように見えるのである。倒れ込まれた子がそれに対抗して押し返しても、F夫はいやがらず、むしろ喜んでるように見えるので双方でおもしろがっている。

表面的には親しんでいるようだけれど人間関係ができていない。そして、記録にも見られるようなふざけをよくする。みんなに笑ってもらいたいと思っっているようである。そこで自分の存在を確かめているようなところがある。ほんとうに相手との交流を含んでいないので空回りなのだが、それに気づいているのかどうか心もとない。まわりの子どもたちはそれを知っているので、安心して笑っているのである。

四歳児の時には、こういう関係はおおむね一対一の関係であったが、これが記録のような一対多になることが出てきた。こういうことが積み重なり、そのクラスの集団の構造化に一定の役割を果たしているのではないかと思われる。

三、和解の笑い

△記録9▽ 女児四人が私を呼びに来た。私はこの少し前にこのグループがHを押しつぶそうとしていたのを見ていたので、「いじめられるのはいやよ」と言う。少ししたしろぐが、す

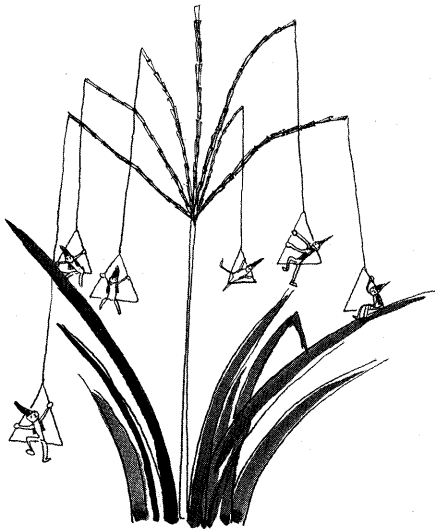
ぐ「いじめるんじゃない。あの砂の中になんか入っているから」と言う。信用することにして砂山をくずし始めたなら、まわりに集まって「まだー」と言っている。用心しながら掘っていたら「棒を取ってもっともっと深く掘って」という。その通りにしていると、後ろからいきなり背中にとび乗って来た。私が掘っている後方に回り、フェンスの上から私のからだの上にとび降りてくるのである。四人が次々とならんでフェンスの上にいる。からだがかくずれたので乗り損なったが、意図がわかり、私は「うそつき。もう絶対、信用せん」と言って去る。四人がやって来る。「あんなに言ったのにうそついたんだから、もう信用できない。遊ばん」と拒否。これ何度かくり返す。その間、私は他の女児数人と砂遊び。R子「いやあーね。いじめて」と言う。私に拒否されて、四人は再び砂山のところに集まって話をしている。私がそちらのほうを見ると、目が合い、なんとも言えない後味の悪い笑顔をする。しばらく目をそらし、再び見ているとまた目が合い、ニヤニヤ笑う。これを何度か繰り返す。結局むこうも不安定になったようで、私のところに戻ってくる。「あぶく

たった」をすることになる。これは気持ちよく遊ぶことができた。給食の時、一緒にテーブルに来てくれとさそわれる。

この記録については、保育者としての私の行為に問題を感じられる方がおられると思う。特に「うそつき」とか「信用しない」などのことには抵抗を感じられると思う。しかし、興奮して思わず投げつけたことばではないことだけはお伝えしたいと思う。

私はこの日、外に出た時にこのグループがものかげで何か相談しているのを見かけた。変だなと思った矢先、ふと気づくと、この子たちが二、三人でHのからだに重なるようにおしかぶさっているのが見えた。Hは泣いてはいなかった、その重さを持ちこたえていた。それで私は強く、「いじめられるのはいやだ」と言ったのである。この子たちはしっかりしている子たちであった。契約を結ぶような気持ちであった。確かめたのだからと思った私は甘かった。彼らは私の予想をはるかに越えていた。さきほどのHに対しても同じことをしたのだということ

がわかった。今までに子どもに対して「うそつき」「信用しない」などということばを使ったことはなかったが、ここは言ってもよいと思った。この子たちはその意味がわかるはずだと思ったのである。



一方で私は裏切られたような気持ちを感じていた。それから立ち直るのに時間がかかった。それがその後何度か和解を求める子どもたちをすぐに受け入れられなかった理由である。が、このままにしておいてはいけないと思

い直し、頭の中でどんな遊びを提案しようかとだいぶ悩んだ。いろいろな遊びが頭に浮かび、あれでもないこれでもないと思ひ悩み、結局「花いちもんめかあぶくたつたならいいよ」というと、子どもたちはほかの子たちと一緒に「あぶくたつた」を選んだ。結果的にこれでもよかったようだ。大勢で手をつないで輪をつくり、声をそろえて歌いながら回る。歌い始めながら、みんなの中におだやかな明るい気分が流れたのが感じられた。気持ちのいい笑顔がもどった。不安定な状況の後に、安定した形のある遊びを私自身が求めていたように思う。この遊びの後半は緊張関係をはらんで、結構スリリングである。五歳児にはこのリズムの緩急がおもしろい。ほどなく給食の用意のため私は保育室にもどった。あとから、この子たちも部屋にもどってきて、配膳の間にも遊びた

いと言う。私が「静かにね」というと、部屋の片方のステージの上で、七、八人が声をひそめ足音をしのばせて「あぶくたつた」をやっていた。その姿はユーモラスでおもしろかった。

保育の場でこのような子どもの否定的な感情に直面することはめずらしくない。人をおとし入れたり、相手が困るのを見て喜んだりする、その感情や行いをよくないと言うのは簡単である。しかし、その子がそうせずにはむように援助するのはそうたやすくはない。子どもたちはそうすることによって自分を守っているのかもしれない。また、自分のやっていることが他者にとってどんな意味を持つかについては思い至っていないことも多い。このように高度に組織化されたように見える行動も、おそらくどこからの借物だと私は思う。私が子どもたちを突き放した後に見せた、彼らの笑いの表情は気まずいものであった。でも、そこに彼らの方向を変えたいという思いも感じられた。それを受け入れるまで少し時間がかかったけれど、その気持ちをなんとかつなぎ止めるこ

とができてよかったと思う。

四、攻撃の笑いのコントロール

△記録10▽ みんなで手紙を書くことになり、美しい便箋が

一枚ずつ配られた。さあなんと書くかというところで、

Uがいきなりその便箋になぐりがきを始めた。同じテーブルの四人が息をのみ、「あーっ」と声をあげる。G子、私をちらっと意識して「A夫見てー、Uちゃんがこんなの書いてー」

△記録11▽ B夫、F夫に「変なって言われても、気にせんことよ」D男、F夫に「変な顔ー、変な顔ー」N夫「おい、人の変なって言ったってしょうがないよー」

△記録10▽は、記述からではわかりにくいのが、G子の顔は明るかった。しかし「笑ってはいけない」というように自分をセーブしたように感じられた。これまでのこの子であればここでは笑っていたと思う。私という大人がいたかもしれない。笑われた相手のUは障害を持った

子どもでもある。先生の日頃の対応から「この子は特別だから笑ってはいけない」と思っていたのかもしれない。

△記録11▽も似ている。変な顔とはやしたてる子がいる一方で、それを気にするなという子どももがいて、たしなめる子どももいる。四歳児の時点では笑っていたことを、五歳児ではコントロールし始めたといえるだろう。そこには意志の発動が感じられる。これまで率直に感性を表現していた子どもたちが、それを制約し始めたことは重要である。たとえ大人の存在下であったとしても、彼らがひとつの価値観を取り込み自らの行動に制約を加えたことは、自我の統制が行われたと考えることができ、大きな変化といえる。これは子ども自身の中で、笑いの攻撃性が認知できたからではないかと思う。

五、性に関する笑い

△記録12▽ I子がアイドルのハイレグ姿のプリント入りハシカチを持ってきた。それを男児の顔にくつつけるように

して見せて歩く。男児は近づけられると、顔を背けたり目をつぶったりして見ないようにする。その男児のあわてる反応がおもしろくて、I子はあちこちの男児にして歩く。

K夫もやられて私に耳打ちする。「エッチなんよ」

△記録13▽ A夫と私が並んで腰かけて話をしていると、ピアノのそばにいたB夫とI夫がニヤニヤ笑って、A夫の方を見て、「くっついた……」と言っている。二人の冷やかしの笑いに負けないように話題に引き込む。

四歳児で、からだのタブーが笑いを引き起こすのによく使われることを報告した。排泄に関わることをわざわざと上げて笑いの対象にするのだが、それがこの記録のような男と女という性的な意味合いを帯びてきたのである。子どもたちにとって、排泄の体験は快感でもあり抑圧の場でもあるという、アンビバレントな体験であるといえる。性的な関係も、彼らにははっきりとはとらえられないけれども、排泄によく似たアンビバレント性を持ったものとして感知されていることは確かであろう。

性に関する大人の様々な反応を見れば、明らかに感じられることである。二つの相反する感覚による緊張を笑いでうけとめることによって、かれらはこの問題をようやくとりこんでいるのではないかと思う。

今回は否定的な笑いに焦点をあてたかたちになってしまったが、からだや運動に関する笑い、自己および他者への親和受容の笑い、理解の笑顔など、依然として健在であることを添えておきたい。五歳児では笑いの二面性が子ども自身に認識されつつあるのではないかと思われる。

(山口大学)

保育への視座 (5)

——若い保育者の方々へ——

河邊 泉

園の実情は、さまざまだが、七月上旬から中旬にかけて「プール遊び」「水遊び」と称する活動が展開されて、九月休み明けに再びこの活動が再開されているところもある。

近年、施設・設備が改善されて中には温水プールなどを使われていると夏季だけに限らず年間を通して幅広く活動ができるようになって来ている。

A幼稚園でも七月上・中旬に「プール遊び」の活動ができるように、小学校のプールを共

用したり、幼稚園児用のプールを使うなど環境が整えられている。七月の中旬のある日の五歳児Y君の活動ぶりを担任のK先生の指導記録とその報告からいろいろ学ぶことができた。そこには一日の短かい時間ではあるが、Y君の活動過程を追ってみるとY君の活動と併行するようにまわりにいる子どもたちや担任のK先生との関係がはっきり見えて来る。

当日の朝、子どもたちはプールサイドに置かれてあった直径70cmほどの輪にゴム製の台

がついたもの五本を見つけてプールの中に運び込んで水遊びをはじめた。はじめはこの輪は水の中に入れてだけで（輪の上端が水面すれすれ程度の高さ）それを使って遊ぼうとはしなかった。しばらく泳ぎ廻っていたがY_s児とH児がこの五本の輪を30×40cmぐらいの間隔に曲線にならべて、それをくぐりぬけながら泳ぎはじめるとY君もY_s児やH児の様子を

じつと見ていて、同じようにくぐって泳ぎはじめた。Y君は「先生みて、みて、みてね」と言ってからスタートし、最後の輪をくぐり終えてから顔を出して担任の顔を見る。担任は目があうと同時に「上手だね。もつとできそう。」と声をかけると黙ってにっこりする。Y_s児がこんどはU字型に並びかえるのをみながら、スタートのところに並んでいたY_s児は、Y_s児の「できた」という声をきくと同時に泳

ぎ出そうとしたがY_s児に「Yちゃんぼくだよ」と声と腕で制止されて少し後にさがって、口をすぼめるような表情をした。そして順番が来ると「先生みて」と言ってからスタートし、ゴールからさらに進んでプールの端まで泳いでいった。担任は「すごい。Yちゃんがんばったね」と言うとき黙ってにっこりする。

今度はY君が自分ひとりで輪を横・縦・横・縦・横と直線になるように置き、並べかえた。H児が、「Yくん、これやるの」と言うとき、うなずいて、両手をたくみに動かしながら身体を右、左にくねらせるようにして輪くぐりをしながら泳いで遊んだということである。

このような「プール遊び」や「水遊び」の活動を指導された先生なら何時でも、また何

処にでもある活動のように思われ、Y君が全身を使って生き生きと泳ぎながらのしくひとときを過ごしたのだというを感じとって下さると思う。私も同じように感じたのであるが、同時にこの日常ありふれた活動とその指導の中に何かもう一度掘り下げて見なおしたり考えなおしてみたいことがあるのに気がついたのでそのことを皆さんといっしょに考えてみたい。

一つは、筆者が傍点を付して置いたY児がじっと見つめているということについてである。Y君は少なくとも泳ぐということには自信があり、能力もあるように見うけられる。しかも、日常生活においてまわりの子どもとの関係はともかく、少なくとも、Ys児やH児のやっていることを「じっと見つめている」ということである。これを単純に他人への関

心を示す行動と見てしまったり、未だ積極的
に他人の活動に入れない状態だと見てしま
易いし、そうかもわからないが、子どもがま
わりの人や物やことがらに対して「じっと見
つめる」と言うことの中身にとっても心ひかれ
るのである。そこには目をすえて見入ってい
る姿がある。通り一辺な見方の時もあるが、
子どもがじっと見つめる時は心を燃やしなが
ら見ている何かがある。

「YsやHはどうする積りだろうか」「あやす
るのか」「速くくぐりぬけてみたいがくぐり
抜けられるだろうか」……など感動も認識も
全てが働いているように思う。「よく先生の
やるのを見て」と過去の教育や指導の中で模
範的・注文的な指導をしたり、それにならざ
れて来た者こそ、もう一度この子どもの「じ
っとみつめる」ところに注意をしてみても、そ

このことの意味を読み解く努力が必要のように思うのである。その「じっと見つめている」姿勢の中に子どもの過去・現在・未来の全てが集約されているとも思われる。これはこのようなブル遊びの中だけにみられるものでなく、あらゆる場について言えることで、真剣そのものであり、単にまねるために見ているのではないように思われる。先生や友だちと心を重ね合わせたいという心持ちも、「じっと見つめる」中に生じているようにも思われる。「もつと違ったことはないだろうか」という活動への意欲をもやしなから「じっとみている」こともある。だから「先生、見て、見て、見てね」と言う子どもからの呼びかけにも真剣に答えなければならぬと思う。

このような感じ方、見方が、K先生には

きつとあったのだろうと思う。今一つは助言のことばの「上手だね、もつとできそう」という応答についてである。「もつとできそう」は先生の評価ではない。これは幼児の活動に対する保育者の勝手な解釈でもない。まさにY君のその時の心持ちそのものだと思う。「ひとりひとりの子どもに寄り添う」とか「子どもに即く」とか子どもへの援助についていろいろと説きもされ解かれもしているが、要は、平素、子どものさりげない「じっと見つめている」活動の中に私たち保育をするものが心をこめることができるかと言うことであろうと思う。これは日頃からの心がけと実践の積み重ねの中で身につけていかれるものだと思うと同時に、心がけや積み重ねはある訓練によっても自己の姿勢を改善し、高めて行くことができる。何かこのようなこと

が保育研修（保育者養成も含め）の中で特に不足しているのではないかと昨今強く痛感するのでこのことを取りあげてみたので是非一考していただきたい。

このことは私が幼児教育に関心をもち、かわりをもつようになった頃から、ずっと確かめて来たことの一つでもあるが、近年、特に「受容する」とか「共感的理解」と言うことばがしばしば使われているに出会うが、使われている方がその本質を理解され、それについての体験がなされて来ているのかと首をかしげたいことがある。

既に、ジャーシルドという児童心理学者が「受容的態度の親」を論じたり、カール・ロジャーズという臨床心理学者が「援助的人間関係」について論じている中に、「受容」とか「共感的理解」の概念が明らかにされている

るので、こうしたことについてここで解説をこころみるスペースもないのでそれぞれの先生方で繕っていただきたいと思います。

ただ、こうしたことばの意味するところは、実際的には把握が極めて難しいようにも思われる。しかし極めて重要なことなのでこれに対しての研修は特に必要と私は思う。性に急に頭で理解しようとするのではなく、折角「保育」という「子どもとの援助的関係」の中でそのことに即しながら学ばれたり、グループで人間関係についての体験学習をされることをおすすめしたい。なお「教育」とか「保育」とか「指導」についても同じだが、特に「受容」とか「理解」ということが、極めてパラドックスをふくむものであることも心に留めておいていただきたいと思う。

*** ある日の育児日記から ***

*** (21) ***

佐藤 和代 ***



有は今まで、昼間は布おむつで過ごしてきました。でも、そろそろ外出することがふえてきて、布おむつではちょっと不安。母乳だけで育っている子なので、ウンチがトロトロなのです。

このあいだも、外出中にウンチをして、服もだっこひもも、私のスカートまで、黄色に染めてしまいました。幸い保育園が近かったので、駆け込んで処理、これがもし電車の中だったらと思うと冷や汗ものです。

仕方ない、外出は紙おむつだ。最近のハイテク紙おむつは、ヒダやらストッパーやらフリルやら

ゴチャゴチャついていて、有のトロトロウンチだってしっかり受け止めてくれるのです。

ところがここにもひとつ

つ落とし穴がある。ある日、布おむつの中に一枚、紙おむつをいれてしまったのです。洗い上がりは悲惨！ 布おむつ一枚一枚に、びっしりついた高分子吸収体のツブツブ。はたいても振っても落ちない。水で流せば流しがたまる。庭中、雪のようにツブツブが舞う… きゃー。



紙おむつだけにすれば、こんな失敗はないのでしょうね。でも布おむつは、地球とサイフにやさしいし。ともあれ、紙おむつは紙でできてるわけじゃない！ と思いきった次第です。

空間を区切ること

伊集院 理子

昨年、三歳児クラスで新入園児を迎えた時、慣れない環境の中で子どもたちはそれぞれに自分を安定させる方策を自分なりに探っている姿が見られた。多くの子どもは、幼稚園で出会った大人である教師との関係を支えるに、教師の動く先々についてまわることで、どうか一日を過ごしていた。Y子は、大好きな小さなボールを見つけ、それをいつも持ち歩くことで心の支えとしていた。そのボー

ルで遊ぶわけではなく、他のことに夢中になってふとボールを手放してしまい、後からその事に気づくと、「Y子のボールは？」と言って、泣いて探していた。K夫は、朝来ると、箱積木で自分が一人入れる大きさに囲いを作って、その中に座って周りの様子をよく見ていた。K夫にとっては、広い保育室の中で自分の居場所を確保すること、その居場所は、他の物、他の人の侵入を拒む一人分の広

さであることが必要であった。私には、そのK夫の姿がとても印象に残っていて、それ以来、空間を区切る子どもたちの様子に注目するようになった。そうして見ると、子どもたちは、日常の保育の中で様々に空間を区切って遊んでいる。

S夫もよく空間を区切る子ども一人である。S夫は人との関係をつくるのがむずかしい所があつて、その頃は、園庭で、お気に入り赤い車にのつて多くの時間を一人で過ごしていた。教師との関係をS夫の方から求めてくることはあまりなく、なかなか目があわなかったり、こちらが何を言っても、さっぱりS夫の心に届いていかないという感じを覚えていた。

S夫は、ゴザやついたて、いす、机などを使って、教室の一角や、おままごとコーナーの周りを大々的に一人で黙々と囲むことをし

ていた。又、ある時は、園庭のお山へとつながる橋の入口の所に縄をかけて「工事中にする」と言つて、セロファンテープと紙をはさみをわざわざ教室から運んで、立て札をかけたこともあつた。このように空間を区切りたがるS夫の行為は、外に対して、特に人に対して、自分を全面的に開くことができないS夫の心の状態を反映しているように、私には思えた。

その後、S夫の空間を区切る活動は時々見られたが、ある時から、区切る物の中にお店屋（こちらの園では、各クラスに、ひきだしのついた台に屋根をつけた木製のお店屋がある）が含まれるようになった。それまでもお店屋その物には興味を持って、自分の思う所に移動したり、上に乗ったりはしていたが、お店屋の前に座つて、お店屋本来の活動をする姿は見られなかった。ついでにやタオ

ルかけ、テーブルで区切られた空間の中に、お小屋が位置ついた時に、S夫はお小屋の前に座って、「いらっしやい、いらっしやい」とやり始めた。「いらっしやい、いらっしやい」と声はかけても売る物は何もないお小屋である。私は、その時は、S夫が始めた活動を発展させようと思って、以前に他の子と作ったアメを導入した。そのアメを媒介に、買いに来た友だちとS夫とのやりとりが成立したことはしたが、今から考えると、そんな表面上の活動の発展よりも、空間を区切ろう区切ろうとしていたS夫が、閉ざした空間の一角を開いて、外に働きかけたことそのことに大きな発展があったのだと思う。単独のお小屋では生まれなかった開かれた外に働きかける行為が、閉ざされた空間の中に位置づけられて初めて始められたことがとても象徴的に思われる。S夫の心が外に開かれる

ためには、まず自分を囲むことが必要で、自分がきちっと囲めれば、外に開く突破口を自分からつくりだしていくのだろう。

その後も、S夫は空間を区切ることを続けていたが、必ずしも「いらっしやい、いらっしやい」とやっていたわけではないが、いつもお小屋がその一郭をなしていた。

二学期、三学期になるにしたがって、S夫は、まだ淡いものながら人に対する興味を強め、人と関わろうとする姿が見られるようになっていった。一学期の頃、友だちなどあまり意識している様子もなく一人で行動することが多く、友だちとの多少のぶつかりあいがあったても、無表情であったS夫が、二学期の後半には、友だちが叩いたといって泣きながら教師に訴えてきたことがあった。友だちが叩かれない存在として特別な意味を持ちだしたS夫の心の動きを物語っているように

思う。

四歳児になったS夫はさらに人に向かう気持ち強めている。これまでは、他の子どもが教師に求めるように何かをつくってほしいということがなかったS夫が、はっきりと教師に対して思いを伝えてくるようになった。担任だけではなく、他の教師とも自分の方から自分の思いを伝えることが多くなっている。大人に対しては大分心を開き関わろうとしたS夫であるが、友だちが相手だとまだうまく自分の思いを伝えることができず、うまく折り合えない所がある。

そんなS夫が最近積木を高く積んで塀のようにして、「ここ駐車禁止なの」と言っていた。さらに一歩人との関係を広げるために、

又自分を囲む必要がでてきた表れではないかと見守っている所である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



鳴門旅行記(上)

上田 雪江

今年も「小鳩農園」と称する幼稚園の畑に、玉葱やじゃがいもが豊作にでき、喜びの中でかなりの収穫を得た。子どもたちと、カレーライスや肉じゃがを作って食べたり、蒸しじゃがいもにして、ほくほくしながら食べたりした。食べながら、お世話になっている人にも分けあげたい気持ちになり、御近所の人や遠くの人たちにも、少しずつ差し上げることにした。丁度、そんな折、鳴門の先生より電話があり、お互いの園の近況を話すうちに、鳴門は、今年、玉葱が不作だったことがわかった。そこで「善は急げ」で玉葱とじゃがいもを送ることにした。このことが、きっかけとなって、鳴門旅行になっていったのである。

鳴門の子どもたちや先生方から、玉葱やじゃがいもを、とても喜んでもらい、子どもたちからも、心ある手紙をもらった。

この手紙を読んで聞かせた。すると、

「ほく、鳴門に行きたいよ。」

「うん、行きたいよ。」

ふぞく

みなさん、おつかいどう。
かれ ~~い~~おれい ~~い~~しかた

ふぞくにきてね

だけどみちしらたいでしょ
だからまた ~~な~~なにかおくと
ねふぞく ~~い~~おつかい ~~い~~

▲鳴門教育大附属幼稚園の子ども達からのお手紙

こはたようちえんのまともだち

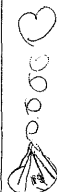
たまおぼくとかがどうもあじが

とうかおへスらいすまい

しかたよまたこはとよう

ちえんのまともだちにかえら

すおつくえあげらるあ



まよこ

「行きたい、行きたい。」

「どうやったら、行けるん？」

「新幹線に乗って行くのよ。」

「わあ、ええなあ。」

「絶対、行きたい。」

「お金も要るのよ。」

「千円札が、どのくらい、要るん？ ぼく、二枚持ちよ。」

「二枚じゃ、ちょっと足りないよ。十枚くらい要るよ。」

など問答をされていて、言葉や目付きが本気であることに気づいた。そこで、

「そんなに行きたいの？」と聞くと、

「うん。行きたい。」行きたい。」

と連発で言う。そして、

「先生はするいよ。もう何度も鳴門に行ったんじゃろ。」

「ぼくも行きたいいいねえ。」

そこで、

「鳴門の幼稚園に行きたい人？」

と、みんなに聞いてみた。すると、ほとんどの子どもが手を挙げたのである。

「鳴門に行くと、すぐには帰って来られないから、一つ泊まるのよ。」

と言うと、今まで手を挙げていたのが、半分ぐらい手を降ろした。私は、心の中で『ほらね、困るでしょ』と思った。正直なところ、ホッとしたのである。この調子で、この子たちに鳴門に行くことの大変さを踏まえて、難題を与えていった。

「先生は、これだけみんなを新幹線に乗せたり、ご飯を食べさせたり、お風呂に入れたりするのは大変だから無理かもね」

と言うと、少し考えて、

「グループをつくって、何回も行けばいいわねえ。」と言うのである。私も、この言葉には、びっくりしたのである。子どもも真剣になって考えると、生産的に進んでいくことが分かった。そこで、私も素直になって、前向きな問いかけしてみた。

「でも鳴門の先生が『来てもいい』といっただどうか、分からないよ。」

と言うと

「電話をかけて聞いてみる。」

と言出し、お手紙に書いてある電話番号を見て

「ここに、かける。」

と言うのである。私も、そこまで言うならば、と思い、その場で私がダイヤルを回して、応対は子どもがしたのである。優しい先生の言葉だったのだから、

「来てもええと言うっちゃった。」

と言うことで、またまた、みんなが大はしゃぎになった。そこで、私は、また聞いてみた。

「でも、お父さんやお母さんが『行ってもいい』と言ってかどうか分からないよ。」

と言うと、

「今日、帰って聞いてみる。」

と言って、その日は勇んで帰って行ったのである。

次の朝、「先生、お母さんが『いいよ』と言うちゃった。」

この言葉に、私は『ドキッ』としたのである。このお母さんは、子どもの話をどの程度、信じて返事をしたのであろうか？ 私は、その子の連絡帳をすぐ広げて見た。

すると、こう書かれてあった。

*

よいお天気が続いていますが、暑い中をよく歩いていきますね。着替えも毎日のように持って帰っています。水遊びなど盛んに楽しんでいるのでしようね。最近、あまり園のことを話ませんが、今日は「じゃがいもを送った幼稚園に行くのに、お金が千円が十枚も要るんですよ。」とか「お父さんから三枚もらって、お姉さんから二枚……」など勝手な算段をしているようです。(笑) それに「側転を教えてあげよう」とのことです。勘違いをしているのでしょうか？

*

私はこの母親に、その返事として、勘違いではなく、そのとおりであることを書いて渡した。もうひとりの子どもは、

「お母さんに言ったけど、『何のことか、さっぱりわからん。』って言うちゃったから、ぼくは、行かれん。」と言って、元気がない。しかし、子どもの中では、「先

生、行こうね。」と言うのである。私も『実現させることになる」と、子どもは喜ぶであろうが、私が余程、腹を決めて、相当に覚悟しないと、大変なことになるぞ』と思ったのである。そんなことをあれこれ考えているうちに、六月二十一日の連絡帳に

*

鳴門の幼稚園の先生方には、春いらした折に、あやとの相手をしていただきましたね。いろいろ大変な問題もあるでしょうが、実現すれば、また、すばらしいですね。電話までする機会をつくってください、ありがとうございます。今日は、リュックサックまで出しております。

*

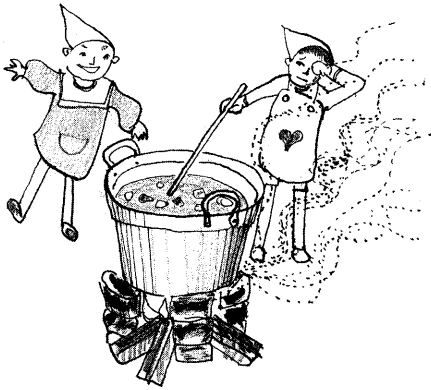
と書いてあった。鳴門行き願いが、親の間にも持ち上がり、親に出会うと、

「先生、鳴門行きは、いいことですね。うちの子どもも、是非お願いします。」

と言われる声を聞くようになってきた。中には、子ども

たちの盛り上がりだけでは要領を得ず、問い合わせも多くなり、いよいよ、大詰めにやってきたのである。

そこで、私も本腰で、綿密に計画を立てることが必要となってきた。連れて行ける子どもの人数の決め方であるが、今の時点では、十六人ぐらいが一班で行きたいと言っている。しかし、私一人では、とても面倒を見るこ



とはできない。十人であれば、何とか行けると思った。

十人は、宿泊や食事などの費用の計算がし易いし、列車の席にしてもまとまり易いと思った。また、宿泊の場合、一室に十人が限度と考えた。そして、まず、鳴門の幼稚園へ七月十四日（土）にお伺いさせてもらっていかどうかの、ご都合を電話で聞くと、大変、快く受け入れてくださったのである。JRと宿泊先へ七月十三日（金）の宿泊の問い合わせをし、OKをもらった。それから、親には、クラスのお知らせとして、鳴門行きの話し合いを七月七日に持つことの通信を出した。話し合いには欠席者の方もあったが、出席された方は全員、賛成してくださった。第一班の十名の中に希望される方を聞くと、子どもの希望と親の希望が、ほぼ一致したが、二名ほど第二班にまわり、残念がった子どももいた。翌日の連絡帳に、次のように書かれてあった。

*

鳴門にもうすぐ行くことを話したら、「やっ
たあ」と、それは喜びました。この春まで「すみれ組に

なったら、キャンプがあるんじゃない？…泊まるん、いや
じゃなあ」とか、不安そうなことを言っていましたの
に、変われば変わったものです。新幹線に乗ることや瀬
戸大橋を渡ること、また、鳴門の幼稚園のことで、小さ
な胸を一杯にしています。本当に願いを実現させていた
だき、ありがとうございます。

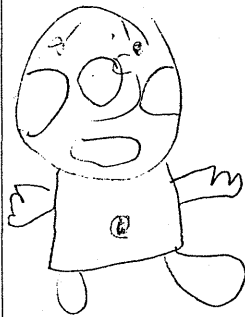
*

鳴門の幼稚園行き、子どもに話しますと、大変喜んで
いました。もう気分だけは四国へ飛んでいるようです。
駅までのご一行の送迎の件ですが、第一便だけでなく、
この鳴門の幼稚園に行かれるときは、私が責任を持って
送迎をお引き受け致します。ご遠慮なく、日時決定する
度にお知らせくだされば日程を組んでおきます。せっか
くのこういうすばらしい計画の一助となれば、幸せに思
います。子どもたちの喜ぶ顔がいっぱい広がるといいで
すね。すばらしい七夕の日でした。願いが叶ってしま
いました。

*

こどもたち
 おくは、ともちけいじはくです。
 こどもたちにもおめでとうのし
 むにしよう
 ありがとう

ワガワガ



▲▲小鳩幼稚園の子ども達のお手紙

おげんきですわ
 ワガワガ14にちた、そちらのようちえんへ
 あそびたいきいます。おとやんもおかあ、
 はんもいってほしいとしました。
 ぼくは、とてもうれしかったです。
 いまじゅんびちをしているところで
 す。そちらのようちえんには、い
 なものがあるわ。いっほいあそびた
 いです。おともだちをいっほいつくりた
 いです。よろしくおねがいます。
 ヤ、ようなみら

かみかのみよしまさこ。

ワガワガ

土曜日の会合、大変、お世話様でした。子どもが結果をとでも楽しみに待っており、私が帰ってくるなり「どうじゃった？ 行ってもええって？」と急ぎ立てるよう聞きたがり、「第一班は、とつても楽しみにしていたお友達で一杯になってしまったから、二回目にしてもおらう」と話しますと、少し、がっかりした様子でしたが、親と離れて旅行するのは全く初めて……希望に満ちています。こういう機会を与えていただいて感謝しています。

*

さあ、これからは、七月十三日の出発に向かっての準備である。まず、健康管理を第一に考えることで、子どもたちにもご飯をしっかり食べて、よく眠ることを毎日のように話した。そして、字の書ける人は、鳴門の幼稚園のお友だちへ「行きますので、よろしくお願いしますよ。」という意味の手紙を書こうという話をした。すると、六人の子どもが真剣に書いていた。

また、お土産の件についても、

「お土産は、何にしようかね。」

と働きかけて聞いてみた。すると、すかさず、

「ウォーリーの本がええよ。」

と答えた。このウォーリーの本は、今、クラスの中で大はやりであった。自分たちの大事にしているものを、友だちにも伝える気持ちで、お土産にするなんて、とても素晴らしいと思った。そして、出発するにあたっての日程や持参品の書いたものを渡して、家でそれぞれのところで準備をもらうことにした。

七月十三日（金）がやってきた。朝の出会いには、もう嬉しくてたまらないらしく、いつも通園道に出会うおじさんに、

「今日は、ぼく一班で鳴門に行って来ます。」

と行って来たそうである。そのおじさんも、何がなんだか、わからないままの挨拶だったようである。午前中は、園生活を過ごし、午後一時に、お母さんに持って来てもらった服に着替えた。そして、リュックサックを持って、午後一時三十分園の友だちみんなに見送られ

る中で、大きなワゴン車に全員乗って出発！ 小郡駅に着くと、人が多く、出会う人出会う人に

「こんにちは！ こんにちは！」

と言ひ、知らない人は不思議がったり、笑って答えてくれている。さすが私も恥ずかしく、

「ここでは、一々、言わなくていいのよ。」

と、一度は言ったものの、子どもたちの浮き浮きした嬉しさは、隠し切れないようである。改札口に入る時、あわてんぼうの私は、椅子に荷物を忘れかけた。子どもを見送りに来ていた親たちに笑われてしまい、そこで親は、子どもに、

「先生も大変じゃから、あんたたちが、この荷物を持ちなさい。」

と行って、持たせてくれた。それからは、子どもも歩く時は、何も言わなくても持ち続けてくれた。小郡発十四時十五分ひかり十八号に乗った。車内は空いていた。まとまって十人座ったところで、私もホッとしたり、

しばらくすると、

「先生、耳が痛い。わたし、耳鼻科に通っちゃったんですよ。」

と言ひ出した。私はドキリ！ である。親と別れて、もう不安になったのかな？ とか本当に痛いのかな？

と、いろいろ頭の中を駆け巡った。その子の様子を見てみると、トンネルに入った。私の耳が詰まったようになつた。『そうだ、これだ』と思ひ、

「唾を飲み込んでごらん。」と言うと、

「あれっ、治つた。」

と言つたので、一安心であつた。この場合も、とにかく健康面が第一なので、どこかで痛くなつたり、変わったことが起こつた場合には、我慢しないで、すぐ言うように話した。三時のおやつに車内に売りに来たアイスクリームを食べた。しばらくして、

「先生、お腹が空いたから、お菓子を食べていい？」

と言つたので出発する折、一人のお母さんから「お腹が空いた時に食べさせてください。」と言つて、たかさんのサンドイッチをいただいたのを、みんなで食べた。と

でもおいしかったので、瞬間に、ペロリと平らげてしまったのである。凄い食欲に、私もびっくりする反面、食べることは健康につながるので、とても嬉しかった。食べて落ち着いたところで、おしゃべりをしたり、トランプをしたりするうちに、岡山駅に着いた。

次は、岡山駅から高松駅までマリライナー号に乗り換えである。迷子にならないように、私の後を付いて来るよう話して、プラットホームを歩いた。後ろを振り返ってみると、二人ずつが手をつないで並んで歩いている。まるで、カルガモの親子の行列のようで笑ってしまった。すると、子どもが大きい声で、

「先生、桃があるよ。」

と言う。私は駅の売店を見て、

「おいしそうじゃね。岡山は桃がたくさんできるところなんよ。」

と話していると、

「先生、そこじゃない。上、上、上を見てん。」

と言うので、上を見ると、何と、すごく大きな模型の桃

があった。私は、何度も岡山には来ているが、初めて見たのである。

「まるで、桃太郎さんが中に入っているみたいじゃね。」

と言って、少しの間、それを見ていた。そこへ駅員の方 が来られて、

「ちょっと待っててごらん。あの桃を開けてあげるから。」

と言って、その場を去って行かれた。間もなく、桃太郎の音楽が流れると同時に、あの大きな桃が割れて、中から桃太郎が出て来たのである。みんなが口を揃えたかのように

「わあ、桃太郎じゃあ……きしもさるもいる……」

と言って、とても喜んでいる。こうして親切な駅員さんのお蔭で楽しませてもらって、また、カルガモ一族は歩いた。

—— 次回につづく ——

(宇部市小鳩幼稚園)

今月は、保育の現場からの大特集です。最近の都心の子どもの減少は著しく、公立の幼稚園や小・中学校が次々に統合・廃校になっています。又、日本人の子どもが減って、かわりに十か国以上の外国人の子ども達が入園している、国際色豊かな幼稚園や保育園もめずらしくありません。変わりつつある都心の状況の中で、どうしたら、質を保ちながら少人数を生かした保育や、言葉や習慣のちがいをのり越えた保育ができるか、考えねばならない時なのでしょう。

*

先日、学生時代に所属していたオーケストラが、あの東京芸術劇場でマーラーの「復活」を演奏するというので、家族揃って聴きに行きました。子ども達に生の演奏を聴かせたいということだけでなく、お母さんもこんなことをしていた時があったのよ、と子ども達に知ってほしいという気持ちもありました。

娘の方は、学校でもふれる機会もあり

オーケストラには興味津々、充分楽しんでいたようです。問題は息子です。演奏が始まるとすぐに、小さな声で「ねえ、いつおわるの?」。続いて、足をぶらぶら、ため息はつく、物を落とす…。飽きて退屈を態度で表しています。その都度「静かにね、シーよ」とたしなめ、やっとおとなしくなったと思ったら、いつの間にか眠っていました。

こんな緊張する場所に連れてきたのが無理だったのかな、まあ、めったにない経験だから、これも悪くはないでしょうと、親としては複雑な思いでしたが、帰りにレストランで食事をしたことで、結構、満足してしまっただけでした。

感想をきいてみると、「ドラゴンクエスト」の音楽もやってくれたらよかったのね」。息子はN響の演奏するその曲のCDをいつも聴いているのです。どうやら、マーラーよりもファミコンの音楽の方が、彼の想像力をかきたたせてくれるようです。

(K)

幼児の教育

第九十一巻 第九号

(一九九二年九月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成四年九月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一〇一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三三三二一九二一七七八一

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いします

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

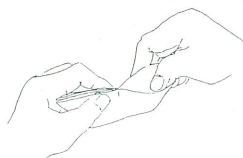
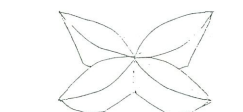
おりがみあそびシリーズ〈全2巻〉

子どもの夢を育てる折り紙を保育に生かそう。四角が三角に、鳥に蛙に変身、幼児も今日から紙の魔術師!!

① やさしい おりがみ

川並知子・著

とり、さかな、うさぎなど伝承折り紙の中からやさしい折り紙を選びました。子どもと母親や保育者とのふれあいの場を提供してくれる折り紙は、ちょっとしたことばかりによって子どもの信頼関係が育ったり、イメージを豊かにすることができます。

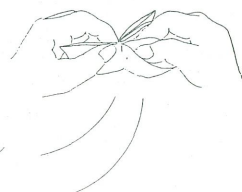
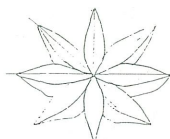


② たのしい おりがみ

川並知子・著

それぞれの作品には、だれにでもわかる色刷図説がついていて、本を見ながら折り方を進めていくことができます。また、折り方の発展例が大きく取り上げられていて、創造する楽しさを味わったり、表現力を養うことができ、友だちと話しながら遊ぶことは友だち関係を育ててくれます。

さくのはな



A4 変型判・32頁・折り紙付・各定価 850円(税込)

全2巻セット定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

ふしぎがわかる

しぜん図鑑

監修／東京大学名誉教授 水野丈夫

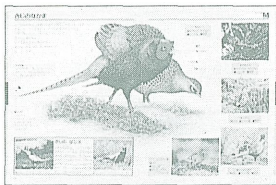


- 第1巻 **こんちゅう** 全国学校図書館協議会選定図書
●監修 元東京都多摩動物公園園長 矢島 稔
- 第2巻 **どうぶつ** 日本図書館協会選定図書 全国学校図書館協議会選定図書 第25回造本装幀コンクール賞受賞
●監修 東京都上野動物園園長 増井光子
- 第3巻 **しょくぶつ** 全国学校図書館協議会選定図書
●監修 園芸研究者 浅山英一
- 第4巻 **みずのいきもの** 日本図書館協会選定図書 全国学校図書館協議会選定図書
●監修 国立科学博物館 武田正倫
- 第5巻 **とり** 日本図書館協会選定図書 全国学校図書館協議会選定図書
●監修 東邦大学理学部 長谷川 博
- 新刊 **ひとのからだ**
●監修 愛育病院小児科部長 岡本 暁
- 新刊 **きょうりゅう**
●監修 国立科学博物館 小島郁生

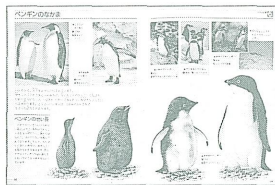
A4判・上製本・本文116頁

定価各2,000円(税込)・セット定価14,000円(税込)

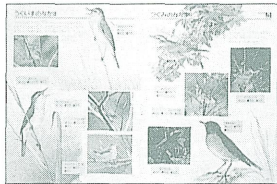
幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。



●写真よりも詳しくわかるスーパーリアリズム・イラストのワイド画面。自然界への興味や関心を高めます。動植物のふしぎさやおもしろさが、ワイドに生まれてきます。



●なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える画面。豊富で美しいイラストと写真の組み合わせで、わかりやすい構成は、子どもたちのさまざまな疑問に答えてくれます。



●基本的な図鑑として十分に活用できる豊富な情報。子どもたちにとって新しい発見もたくさん用意しました。子どもたちに探究心や科学する心が育つように、応援します。

調べる、確かめる、
知ることが楽しくなる
美しいイラストと
豊富な写真。



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館